



開校当初の中台中学校(加藤多美子氏所蔵)

成田
 歴史
 玉手箱

18回

歴史と伝統文化の
 まち・成田。市内に
 は、歴史ある文化財
 が多数あります。

中台中学校誕生の句碑

40年間の教職人生と 未来への思いを込めて

薄氷^{うすらい}や 生徒三十 開校す 南陽 と刻まれた句碑が中台中学校の東側校庭に建っています。中台中学校は、成田ニュータウン造成後の最初の中学校として、昭和48年4月に生徒37人・職員9人で開校しました。この俳句の作者は、初代校長故相川行雄さんで、句碑にある南陽は先生の俳号です。



初代校長 相川行雄さん

同校ができた昭和40年代は、成田空港建設の閣議決定(41年)がなされるなど成田市にとって激動の時代でした。空港建設は教育の現場にも大きな影響を与え、騒音地域における防音校舎の建築や人口増加が予想されるニュータウンの小中学校建設など、新時代に向けての課題が山積していました。

長引く反対運動で開港が遅れ、当初見込まれていた生徒が集

まらないという問題を抱えるなか、成田に移住してきた保護者や生徒の不安と期待を一身に受け止めた相川さんの心境は、まさに薄氷^{はくひょう}を踏む思いであったでしょう。教員生活40年間のしめくりとして新設中学校の旅立ちに全力を傾けて打ち込んだ教育者としての信念と情熱、そして未来への思いをこの一句に込めたに違いありません。



昭和55年6月に建立された句碑

開校したばかりの学校の環境づくりは、悪戦苦闘の日々でした。広い校舎の清掃は、一人1教室でも足らず、窓拭きや除草作業はPTAのみなさんに手伝ってもらいました。校庭には樹木が全くなく、米野・山口地区から若木を寄付してもらい新住民と力をあわせ植樹し、砂が舞う校庭には芝を張る毎日が続きました。「一つの教室に生徒30名と職員9人が、給食をとりながら談合した中台家族の味は、およそ学校という味ではなかった。不安を胸の一番奥に押し込めながら……。グランド芝が芽を出し、校庭に草花が咲いてくると、少しずつこの不安は喜びと楽しみに変わっていった」と『薄氷の碑』に記しています。

中台誕生の苦難の歴史を物語るこの句碑は学校のシンボルです。生徒・職員と地域の人々が一体となり、励まし協力しあってスタートした中台中学校は、ことし創立30周年を迎えました。



昭和50年3月、第2回生卒業写真(加藤多美子氏所蔵)
 前列中央が相川行雄さん

編集後記

本紙に何回か登場した推進教員のみなさん。今回の特集でもその活躍ぶりは健在でした。「一人ひとりの力を引き出せ!」子どもたちと生き生きと向かい合う姿に、見出しもつい威勢のいいものに。児童・生徒と一緒に給食を食べ、クラブ活動で汗を流し、悩みも聞いてくれる彼らは、まるで良いお兄さんとお姉さんといった感じです。子どもたちのうれしそうな顔をみると、「授業が楽しくなった」という感想にも納得。彼らは「個性を生かす教育」に欠かせない存在になりつつあるようです。

ところで、田中耕一さんのノーベル化学賞受賞は、この事業を推進する側にとって、何よりうれしいニュースだったのでないでしょうか。いろいろな報道を見る限り、田中さんが相当個性的であることは間違いなさそうですから。受賞は、教育と社会(会社)の環境がそれぞれ氏の個性を伸ばし、認めた結果の偉業達成であった気がします。没個性社会を絵にかいたような職場の広報マンが、個性うんぬんと言うのもおこがましいのですが、田中さんの受賞に心より拍手を送りたいと思います。